

# 夕刊文化

作家

リービ 英雄

## こころの玉手箱



自分の家はどこにあるのか。

ぼくはアメリカで生まれて、大人の人生の半分以上を日本で過ごし、今は日本の永住者になっている。だが、記憶の最古層にある「自分の家」はアメリカにも日本にもない。

五歳から十歳まで、父の仕事関係でぼくは両親と弟

### 台湾の模範郷

といっしょに台湾に住んでいた。台湾のほぼ中央に位置する台中という地方都市、その町外れには模範郷という場所があった。

その模範郷は、三十戸ほどの「村」だった。しかし、台湾人の農村ではなかった。日本統治時代に創られた、日本人の住宅地だった。一九五六年に住みつけた家

は、実は「日本人」が創ったのだ、という話が中国語でぼくの耳に入った。

一九四五年に日本人がいなくなった村は、「もほんきょう」ではなく、「モーファンシヤン」と呼ばれていた。アメリカ人の家族が、中国語の説明を聞きながら住みつけた、広々とした日本家屋。畳部屋と板の間と、

## 失われた「自分の家」に光



台中の家で撮った家族写真。一番前が筆者

民党軍の兵士

があつたことに、ぼくは気がついた。

リービ・ひでお 1950年米国生まれ。作家、法政大教授。「万葉集」の英訳で全米図書館賞を受賞。著書に「星条旗の聞こえない部屋」(野間文芸新人賞)、「千々にくだけて」(大仏次郎賞)、「仮の水」(伊藤整文学賞)など多数。

亜熱帯の陽光を受けて黄ばり激しい近代化によって解んだ障子と、庭の池に泳ぐ鯉と、池の背後の築山。それがぼくの一歩古い記憶の家なのである。

「自分の国」にはなかった、しかしまぎれもなく「自分で亡くなり、日本に送られた家」。十歳で台湾を去り、永久に離れた日本家屋は、幻の家となり、夢の中の家となった。現実の東アジアにあった家は、西洋よ

頃から残った、高い塀をめぐらしている家並と、その前の未舗装の大通りを歩くと、日にやけた農民と、国

「模範郷」という作品を、今年刊行した。多くの読者から、失われた子供時代の家を思い出した、というコメントをもらった。多くの現代人には、現実から消えたもう一つの「自分の家」